

こぐまのマロン君と冬支度 著…かずら

「もう冬がやってくるわね」

マロン君のお母さんは、キッチンでスープを作りながら、窓の外を眺めました。

窓から入る風のおいが、そろそろ冬の到来です。

ちよつぱり微笑むと、窓を閉め、「さあ、夕飯ができましたよ」とスープを運んでいきました。

その夜のこと。

こぐまのマロン君は、そろそろおやすみするところでした。

寝る前に戸締りしなくちゃ。

窓が閉まっていることを確認するために、かぎを触ると、窓はすでにひんやりしていました。

曇りガラスを手で拭いて、顔を近づけて外をみると、窓の外では、しとしと雨が降っています。

明日は寒そう。

マロン君はカーテンを閉めると、そそくさとベッドにもぐりこみました。

「わ、雪だ！」

朝目をさめたマロン君は、窓の外を見るなり喜びました。

マロン君は毛皮を覆っている「くま」

という動物ですが、

雪が降る白い世界は、めずらしいものでした。

なぜなら――

「冬眠する前に雪が降ってしまったな」

木の実のドリンクをすすりながら、

マロン君のお父さんは

つぶやきました。

「この冬は冬眠するのは間に合わなかったかもね」

マロン君のお母さんは

豆をつぶしながらいいました。

「マロン、あまり遠くへ行ってはいけないわよ」

お母さんはドアのほうへ声をかけました。

マロン君が外にでると、一面白い景色が広がっています。

マロン君は目を輝かせながら、
白い世界に飛び込みました。

マロン君が白い森の中を歩いていると、
遠くから「誰かーたすけてー」という声が聞こえてきました。

誰かの声がある。

声があったほうに歩いてみると、
ぽっかり穴が開いているところがありました。

中をのぞいてみると、
そこにはリスのリリーさんがいました。

「大丈夫ですか？」と声をかけると

「ああ、よかった。これはマロン君、いいところにきてくれた。」

ほっとしながら

リスのリリーさんはいいました。

よくみるとリリスさんの周りには

木の実がたくさんちらばっていました。

どうやら突然の雪で、

物資をいそいで運搬していたようです。

「僕も手伝うよ」

そういうとマロン君は

まずリリーさんを穴から引っ張り出し、
それから落ちた木の実を

ひとつずつひろいあげました。

リリーさんが、数を確認したので、

マロンくんは荷物を持って、

リリーさんの家に向かいました。

リリスさんの家に着いたとたん、

木の上の小屋のドアから、

小さなリスさんたちが出てきました

「どこにいたの？」「心配したんだよ」

リリーさんは小さなリスの子たちが、

家で留守番していたのです。

「心配かけたわね、もう大丈夫よ」

リリスさんはそういうと、

坊やたちの頭をなでながら、家に入っていきます。

「せっかくだから、お茶はどう？」

リリスさんの言葉に甘えて、

マロン君はリリスさん親子と一緒に

お茶をいただくことにしました。

マロン君が家の中に入ると、

天から透明な結晶が、ひらりと舞い降りました。

おわり

こぐまのマロン君と冬支度

平成二十九年四月三十日 再飯

著者…かずら

発行…蔓庵

